



ホームカミングデイ 同窓会集合写真 2014年10月18日(土)

東京大学教養学部教養学科地域文化研究分科イギリス研究コース
大学院総合文化研究科地域文化研究専攻小地域イギリス

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 (8号館 402号室) TEL/FAX 03-5454-6304 (直通)

Email: british[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

Web: <http://british-section.c.u-tokyo.ac.jp>

主任挨拶 アルヴィ宮本なほ子

2016年度主任を務めますアルヴィ宮本なほ子です。2010-11年度も主任をしましたので2回目なのですが、5年前とは何もかも変わっていて、「Five years have past; five summers…」(ワーズワス『ティンターン修道院』冒頭)と思わず口ずさむ中であつという間に最初の学期を終え、「秋学期」を迎える時期になりました。昨年度から「春学期(Sセメスター)／秋学期(Aセメスター)」と学期の呼称も一新し、学期の中に2つのタームがある「4学期制」、授業も105分授業になるなど大きな変化がありました。また変化は続いており、来年度からは進学振り分け制度も後期課程諸学部が主体となって選ぶ形式になり、大学全体が変貌を遂げようとしています。その中であつて、イギリス研究コースは、「イギリス科」のよいところはそのままに、新しく変わるべきところは変えて、しなやかに、韌く、進んでいきたいと思ひます。

さて、昨年のニュースレター発行後の出来事を今回は2つに分けてお話いたします。まずは駒場の中のイギリス科について。2016年3月、2015年度の卒業生(7名)、修士課程修了生(2名)を無事に送り出すことができました。卒業式、修了式から約1週間後、新たに3年生4名、修士入学者1名、博士進学者1名を迎えて、2016年度が始まりました。今年度は、かつてイギリス科

の外国人教師をされた Andrew Fitzsimons 先生をAセメスターに大学院の非常勤講師として再びイギリス科にお迎えします。また、外国人客員教授として、Trinity College (Dublin)から Graeme Murdock 先生が来日され、7月に集中講義をしていただきました。どちらの先生も授業は学部・大学院共通の科目としていただき、Murdock 先生の授業には、多くの学生が参加し、多くを学んだ様子でした。Murdock 先生には「Tokyo Report」をご寄稿いただいております。

次に、駒場の外のイギリス科について。昨年度はホームカミングデイにイギリス科を開けませんでした。昨年10月、4回生の沖山泰彦さんがサンフランシスコからの帰郷の折にはるばるイギリス科をお訪ねくださり、その上ご寄付までいただきました。メールをなさらないので、郵便で届くイギリス科のニュースレターを楽しみにしていらっしゃるということで、発行する私たちも大変嬉しく思いました。また、学生たちともども人生の年輪を重ねられた先輩のお話を大変興味深く伺いました。7月には、Sセメスターに大学院超域文化科学専攻比較文学比較文化コースへ海外からの招聘教授としていらした34回生のトロント大学教授榊敦子先生がイギリス科のコモンルームをお訪ねくださり、学生たちは、海外で最前線の研究と教育に携わるイギリス科卒業生を初めて間近

イギリス科 ニュースレター

September 2016

特集：卒業生の今

に見て大変感銘を受けておりました。

ニュースレターをご覧になると、学生も教師もコモンルームに集まっているという印象が強いかもしれませんが、そうありたいと思うのですが、学生はコモンルームで空き時間も勉強などをしていますが、教員の方は、改革につぐ改革で一年中師走という状態が続いており、なかなかコモンルームまで足を運べなくなっているのが現状です。ホームカミングデイでコモンルームを開けているのは数年前からイギリス科だけになりましたが、今年度は、当日の午後、別の学務で主任が不在となるため、大変申し訳ないのですが、ホームカミングデイにはイギリス科を開室しません。その代わりに、今回のニュースレターでは、卒業生の方々の特集を組みました。紙面の都合上、3名ですが、異なる世代の異なる場で活躍している3名からご寄稿いただきました。イギリス科の今とイギリス科卒業生の今をどうぞお楽しみください。



Tokyo Report

Professor Graeme Murdock

Trinity College Dublin

Visiting Professor 2016

'Why did Britain vote to leave the European Union?' This is a very reasonable question to ask but not a straightforward one to answer! As a British citizen, and as the current Director of the Centre of European Studies at Trinity College Dublin in Ireland, it is a question that has certainly preoccupied my mind this summer. It was fortunate indeed, and a great honour, to reflect on the causes and consequences of Brexit while spending time as a visiting lecturer in British Studies in Komaba. Talking with colleagues around the campus, and with postgraduate students over tea in the British Studies Common Room, provided a wonderful chance to exchange ideas about how Britain's cultural, literary and political history have brought the country to this period of uncertainty and transition.

During my time in Tokyo I taught a series of classes on the impact of the Reformation; a cultural revolution that has shaped British and European identities over the past 500 years. We discussed how the Reformation movement that was launched by Martin Luther in 1517 has affected European life in the short-term and in the long-term. In class we debated changes to the character of religious life, cultural expression, economic development, and social relations within families and communities. And, as one student suggested, perhaps we might understand Brexit as a new Anglican moment—when Britain (or England at least!) once again has turned away from the traditions of continental Europe to seek its own distinctive path. This suggestion, among many others, offered fascinating insight into the perceptive understanding of students at Tokyo about a broad variety of aspects of British culture and history.

During my visit I was delighted to meet with Tokyo students who had previously spent time on exchange at Trinity as well as Trinity students currently on exchange in Komaba. I hope that we can find ways to build on our connections and look forward to welcoming more students from British Studies to Dublin. In between classes, my impressions of Tokyo built up into a mosaic of colours, sounds, and experiences that are almost impossible to distil into any sort of clear or simple image. Looking down from the observatory of the Tokyo metropolitan government building one sunny evening towards the end of my visit my mind turned to crows and crickets, kabuki and baseball, temples and gardens, sashimi and yakitori, and to the kindness and generosity of

those who had made me feel so welcome during my stay in this extraordinary city. Indeed, it would be more than remiss not to end with most sincere thanks to the staff and students in British Studies. I could not have wished for more generous hospitality and am more than grateful for the opportunity to teach and to learn during my time in Tokyo.



大学院博士課程 3 年の町本亮さんが、昨年 11 月になりますが「D・G・リッチーとオスカー・ワイルド—世紀末のイギリスにおける「設計への意志」」（『ヴィクトリア朝文化研究』第 13 号（2015 年）、22-46 頁）で、日本ヴィクトリア朝文化研究会優秀論文賞を受賞しています。

おめでとうございます！



大学院博士課程を課程修了しイギリスに留学中の稲垣春樹さん（Department of History, King's College London）が無事に viva に合格しました。博士論文のタイトルは、'The rule of law and emergency in colonial India: The conflict between the King's Court and the government in Bombay in the 1820s' です。学位授与は年末になる予定だそうです、一足先に Many Congratulations!



「イギリス科から北米へ」

Professor

Department of East Asian Studies/
Centre for Comparative Literature
University of Toronto

榊敦子 (34 回生)

いつも懐かしく拝読しておりましたイギリス科ニュースレターに執筆させていただくことになり、とても嬉しく思います。私は 1984 年にイギリス科に進学し、当時主任でいらっしゃった川西進先生、その後主任に就任されました行方昭夫先生、山内久

明先生、出淵博先生、当時外国人教師としていらしたグレアム・ロー先生、その他多くの先生方の名講義を拝聴いたしました。1986 年、橋口稔先生のご指導の下、D. H. ロレンスの作品における月についての卒論を提出して卒業いたしました。その後、駒場の比較文学比較文学科修士課程に進学し、川本皓嗣先生のご指導を仰ぎつつ、イギリス科の先生方のゼミに引き続き参加させていただきましました。水をテーマにした修士論文の一章として、E. M. フォスターを取り上げましたのも、川西先生のゼミでの精読あったことです。

1989 年、博士課程の途中で、カナダ、バンクーバーのプリティッシュ・コロンビア大学 (UBC) のアジア研究科に留学しました。バンクーバーは多民族都市で、私も違和感なくすぐに溶け込みました。気候も治安もよく、私のように海外で生活した経験のなかった者には最適の環境であったかもしれません。倉橋由美子論で 1992 年に Ph.D. を取得いたしました。倉橋の小説にはジェーン・オースティン、アイリス・マードックなどへの言及が見られます。カナダはもちろん英連邦の一員ですので、学位授与式ではカナダ国歌に併せて God Save the Queen も演奏されました。

博士論文の口頭試問を通過した後、Visiting Assistant Professor として UBC で一年間教えました。その間にテニユア・トラック（フルタイムの雇用、七年後に終身雇用への審査を受ける）の職を探し、公募の結果アメリカのマサチューセッツ州ケンブリッジにあるハーヴァード大学の東アジア文明学科に Assistant Professor として就職することが決まりました。同じ英語圏、北米とはいっても、カナダとアメリカとでは法律も社会的慣習も大きく異なり、また西海岸と東海岸の隔たりもあってか、新天地での生活はあまりにも異質でした。言葉一つにしても、まるで違いました。ケンブリッジはボストンの郊外に位置しますが、転居して一年後に旧友に会ったとき、すっかりボストンなまりになっていると笑われたものです。

ハーヴァードでテニユアを取ることは難しかったのですが、2000年の秋に、テニユアを提供して下さったトロント大学に移籍しました。山内先生、アルヴィ宮本なほ子先生の在籍された大学です。ノースロップ・フライ、マーシャル・マクルーハンなどを擁したところでもあります。卒業生にはマーガレット・アトウッドなどカナダを代表する文学者も名を連ねています。当大学では新任の教員にmentorを配する仕組みになっており、私にはかねて心酔していたポストモダン文芸研究の大家リンダ・ハッチェオン Linda Hutcheon 教授が任ぜられ、暖かく接して下さって感激しました。

トロントに参りましてから、ほぼ二、三年に一度は大西洋を越えるようになりました。2007年からは健康上の理由で、学期中に開かれることの多いアメリカへの学会出張を減らしましたが、夏期休暇にはヨーロッパの学会になるべく出かけるようにしています。あくまでも個人的な印象にすぎませんが、ヨーロッパの研究者の方々は、学閥、人脈に囚われず、出版物や学会発表などを通じて交流が深まることが多く、学問の醍醐味が味わえるからです。2003年にはリーズ大学、2005年にはケンブリッジ大学から、主催者の先生方と一面識もなかったにも関わらずお招きをいただき、学会に参加いたしました。前者は Rachael Hutchinson and Mark Williams, eds., *Representing the Other in Modern Japanese Literature: A Critical Approach* (Routledge, 2007) に、後者は P. F. Kornicki, M. Patessio, and G. Rowley, eds., *The Female as Subject: Reading and Writing in Early Modern Japan* (Center for Japanese Studies, University of Michigan, 2010) にまとめられ、拙論文も収められております。

2012年から比較文学センターとの兼任となり、それを機に英文学を教育や研究に盛り込みたいという気持ちが一気に高まりました。例えば *Diasporic Cities: Itinerant Narratives of Metropolises by Travellers and Expatriates* というゼミでは、クリストファー・イシャーウッドの *Goodbye to*

Berlin、ジョーゼフ・コンラッドの *The Mirror of the Sea*、ヴァージニア・ウルフの *The London Scene: Six Essays on London Life*、夏目漱石の「カーライル博物館」「自転車日記」などを英語原文、乃至は英訳で、院生たちと読んで参りました。

昨年、10年がかりで写真と日本文学についての本を上梓することができましたので、その為には棚上げになっていた都市と身体についての仕事をまとめつつ、スポーツとナラティブという新しい研究に着手したいと思っています。

「制度で救いきれない子供たちに寄り添う政策を」

文部科学省大臣官房国際課

石橋孝則 (58 回生)

このたびアルヴィ先生から「現在の業務内容について紹介してください」との嬉しいご依頼を受け、これまでの仕事を振り返りながら、徒然なるままに書いています。

2010年にイギリス科を卒業して早6年(!?)、文部科学省では一貫して教育行政に携わってきました。現在は大臣官房国際課という、省全体の国際関連業務の舵取り役とされる部署で、定住外国人に対する教育支援や、インターナショナルスクールへの支援などを主に担当しています。

現在の仕事の中で日々痛感するのは、「制度で救いきれない子供たちに寄り添う」ことの大切さです。ご存じのとおり、戦後(ものによっては戦前から) 営々と築き上げてきた我が国の諸制度も、システムの疲労か、はたまたグローバル化など想定外の事態の到来によるものか、至る所で軋みが生じています。教育制度についても例外ではなく、戦後間もなく制定された学校教育法を中心に構築された学校教育体系も、時代に合わぬものになりつつあります。具体的な例で言えば、我が国に定住する外国人の数は現在200万人以上おり

(法務省調べ)、就学年齢の児童生徒のうちほとんどは「一条校」と呼ばれる小学校/中学校や、あるいは「各種学校」と呼ばれる外国人学校に在籍していますが、中には不就学や自宅待機状態になっている子供もいます。特に大企業の工場労働者が多く暮らす東海地方では、ブラジル人やペルー人を中心に、多くの不就学児童生徒がいますが、従来の学校教育体系からすると、こうした子供は学校に通っていないため「存在しない」ことになってしまいます。他方で、あまり言いたくはありませんが、こうした子供たちはデータ上非行や犯罪に染まりやすい傾向にあり、潜在的な社会リスクとなってしまうのも事実です。こうした子供たちにこそ、教育機会が確保されるべきなのですが、いかんせん不就学状態のため、行政でフォローしきれないというジレンマに陥っているのです。

文科省では基礎自治体やNPO法人などと協力し、日本語教育や地域交流などの取組を通じて、こうした子供たちを公立校や外国人学校へ就学させる手助けを始めました。しかし、必ずしも法的な根拠があるわけではないため予算確保に難渋する面もあり、安定した事業運営を可能にする枠組みの構築が求められています。(※今年の通常国会に、不登校の子供たちの学びに法的保障を与える「多様な教育機会確保法案」が提出されました。残念ながら審議未了により成立には至りませんでした。従来の学校教育の枠にとられない教育の姿の模索は確かに進んでいます。)

長々と施策説明を続けてしまいました。最近 Brexit 関連の報道に触れ、どの国も時代変化の中で綱渡りを強いられているのを感じました。リベラルアーツは即戦力的スキルをもたらすものではありませんが、イギリス科で習得した様々な素養がふとした瞬間にアイデアに結びつくこともあり、学びの不思議さ・奥深さを感じます。先行き不透明な時代だからこそ、多角的な視座から社会を眺めるリベラルアーツ的資質が求められると思っています。国家公務員こそそうした資質が不可欠だと考えており、法学部や経済学部で国家試験の勉

強に明け暮れるのではなく、イギリス科で歴史・文学・社会思想などをたっぷり勉強したことを（密かに）誇りに思う今日この頃です。今後も一層のご指導のほど、どうぞよろしく願いたします。

国会図書館のしごと

国会図書館

大久保玲 (61 回生)

ご無沙汰しております。大久保です。

今年春に名残惜しくもイギリス科を卒業した後、国会図書館で働き始めました。2011 年度卒業生の良永さんが職場の先輩であったり、イギリス科で同期だった曾木さんと引き続き同期であったりと、卒業後もアットホームな職場で過ごすことができ幸せです…。

ですが、職員スペースが利用者に対してほぼ開かれていないために、その実態は謎に包まれて「図書館で何してるの？本並べてるの？」と聞かれてしまうこともしばしば。ということで今回は（宣伝も兼ねて）、勉強好きな地域文化生にうってつけの職場の紹介をさせていただきたいと思えます。

国会図書館はその名の通り永田町にあり、第一の役割とされているのは議員の方々の調べ物のお手伝いをする事。またそれと並んで、日本で唯一の国立図書館として、日本で刊行されたすべての本を保存するという大切な役目もあります。職員の仕事は多岐に及びますが、代表的なのは、

- ・衆参議員のための調査・報告活動
- ・資料の収集・保存
- ・利用者へのサービス
- ・「図書館の図書館」としてのサービス
- ・海外図書館との連携強化

くらいでしょうか。ふんわりしていますが、1年目の私にはよくわからないくらい

多種多様な業務がある、ということですから…。しかも業務内容はとても流動的で、ご時世に合わせた仕事も次々に出てきます。

たとえば東日本大震災の後には、様々なメディアから震災関連資料を集め、それらの検索・閲覧を可能にした「ひなぎく」というアーカイブが作られました。こちらでは書籍に限らず、当時の TV 映像等も観ることができます。紙媒体に限らない情報・情報源の保存も昨今の課題なのです。

そして、書籍の電子化もタイムリーな話題です。今年 6 月には電子書籍の一般化が進んでいるフランスから有識者を招いての講演会が開催され、作家の藤井太洋氏や平野啓一郎氏もパネリストとして参加されました（私も職員としてお話を聞くことができました！）。電子化によって起こる文学の変質や、図書館の役割の変化、著作権の問題などについて議論が交わされ、難しくも興味深いものでした。

このような業務の性質上、職員には色々な分野の知識が求められます。この前など曾木さん（学生時代は歴史専攻）は、電子情報部で HP の管理のために走り回りつつ「IT の勉強をしなければ…」と嘆いていました。たいへんお気の毒です。

一方、私が担当しているのは、書誌の作成です。書誌というのは、OPAC で本を検索して、資料を選択すると出てくるあの画面のことです。納本された資料の出版事項を確認して、内容を要約・記録して、云々、という作業をひたすらこなしているのですが、1 日のうち目を通すのは恋愛ハウツー本から量子重力理論の本まで、だいたい 30 冊くらい。嬉しいのはたまに面白い本を見つけられることと雑学が増えること、大変なのは肩こりです。

作業内容からわかるように、私のいるところは職場としてはなかなか地味＆平和です。他になにか目立った特徴を挙げるとするならば、女性が働きやすい雰囲気（出産後の復帰率はほぼ 100%、男性の育休取得率は 20% くらい）でしょうか。特に私のいる部署は子育て中の女性が多くて、優しい方

ばかりです。上司との距離も近く、ダンディーな課長がしょっちゅうかまって下さいますし、サークル活動も楽しいし…更には入館後の勉強環境も整っていて、語学研修や留学制度、有志の勉強会に参加できるのはとてもありがたいです。そのためか、わりと学者肌の人が多いかもしれないですね。

良いことばかり書いてしまいました。私目線だとやたらホワイトな職場になってしまうので、ぜひ曾木さんにもご紹介をお願いしたく。こき使われていらっしゃるのになかなか面白いお話が出てくるような気がします。



卒業生の方へ お礼とお願い

昨年のニュースレターにて同窓生の皆様にご支援をお願いしました後、多くの方から御芳志を賜りました。紙幅の関係上、お名前を記すことができませんが、深く御礼申し上げます。当面、資金面での問題はなくなりました。

「イギリス科ニュースレター」は現在、紙媒体と電子媒体の 2 種類の方法で皆様のお手元にお届けしております。今回、紙媒体にてお送りした方で、電子化にご協力いただける方は、下記卒業生専用アドレス

igirisuka[at mark]ask.c.u-tokyo.ac.jp

まで、送付先アドレスのご連絡をお願い致します。

また、お届けいただいているご連絡先（住所・電話番号・メールアドレス等）に変更などがおありの場合も、上記までご連絡をお願い致します。

2016 年度 イギリス科運営委員

アルヴィ宮本なほ子(主任/広報委員)

西川杉子(副主任)、小川浩之(分科委員)

後藤春美、中尾まさみ、大森雅子(教務補佐)